

【小説】七色春日 【イラスト】魁李



きょく ち れん あい

# 愛地球

1

試し読み版



# CONTENTS

序 章	006
第一章 孤島混生	011
第二章 共生濁流	050
第三章 冷血奔流	071
第四章 一鬼夜行	111
間 章 孤影悔恨	146
第五章 生命剪定	166
第六章 病的過去	212
第七章 空間相違	242
第八章 真情火炎	281
外 伝 絶壁に立つ漂流者	322

## 特別付録 「将来の夢」

ルナ	144
赤音	164
美菜	210
唐宮	240
ヒロト	320

※小学四年の文集より抜粋

## 序章

船酔いで今にもくたばりそうだった。

足腰は芯を引き抜かれたみたいに鈍くなっている。ぐらつく身体を部屋のあちこちにぶつけ、狭苦しい客室の扉に体当たりして廊下に踏み出した。

「どうなってる……」

壁に手をつけて倒れ込まないようにするのがやっとだった。荒くなった息は熱を持っている。垂れ流れる脂汗が首筋につたって寒気を呼ぶ。併発している熱が俺を蝕んでいる。

ワイシャツの胸ポケットから酔い止めの錠剤を取り出して口にした。怒りを込めて細かく噛み砕く。給湯室に辿り着くまで待っていらなかった。

左胸に手をあてた。心臓が耳障りなほど脈動している。さざ波のような胸騒ぎは収まる気配がない。酷く悪い予感が胸の中で渦巻いている。  
頭を振って状況を確認する。

電気系統が不安定なのか、狭い通路の蛍光灯は明滅を繰り返していた。夜の薄闇で視界がぼやけている。降雨の影響なのか、空気の中に水気を含んだ雑な臭いが混じってきている。

船の揺れ方も尋常ではなく、急に前後に揺れたかと思えば激しく左右にもかき回された。コントロールを失って嵐に翻弄されていることは間違いない。雨粒の船体を叩く音が遠くから響いてきている。次第に激しさを増しているようでもあった。

数十メートル先の昇降階段から足音とともに船員が現れ、青い顔をして走ってきた。

俺を見つけて一瞬だけ足を止め、何か言いたげに唇を震わせたが扉の向こうに消えた。

不審に思い、階段に視線を戻せば――

「唐宮！」  
からみや

「なんだよ……なんとか寝るって、さつき決めたばかりじゃねえか」

寝癖だらけの金髪をかきあげ、灰色のガウンを羽織った唐宮がベッドから上半身を起こした。億劫そうに

毛布に手をつき、立ちあがろうとするが、腕に力が入っていない。仕方なく肩を貸して強引に戸口まで引って張ってやる。

「あれを見ろ」

顎をしやくった。

板張りの床を透明な何かが迫ってきていた。均一の速度で広がる絨毯のようだった。船底から浸水してきている。それも猛スピードで。あつという間に靴底が濡れていき、床と扉の隙間に水が流れ込んでいく。

明りの点いていた他の客室から物音がし始めた。扉が幾つも派手に開き、乗客たちが何事かと血相を変えて飛び出した。

動揺のざわめきが巻き起こり、布地を切り裂いたやうなけたたましい悲鳴がある。水から逃れようと誰かが背を向けた。その後を小走りで追う人間も出てきた。

唐宮の顔は完全に血の氣を失っていた。事態が飲み込めずに立ちすくんでいた。

「ヒロト……」

「逃げるぞ」

どこに、とは唐宮は聞かなかった。俺も明確な答えを持っていなかった。

四方が海でここは船の中。どこに逃げ出すというのか。

部屋の荷物をかき集めて脇に抱え、移動を開始する。弱った身体にムチ打ち、足を動かした。水かさは増しくるぶしを乗り越えて靴下まで侵食してきた。船を構成している鉄骨が、圧力で軋みギィギィと重苦しい金属音を上げ、焦燥感を肥大させる。

通路が不自然に歪んだ。天井から吊り下げられた裸電球が振り子のような動きをしていた。船体は斜めに傾き始めている。何度もすつ転びそうになったが階段を駆け抜け、甲板まで上りきれたのは奇跡に等しかった。

強風で押し込められていたハッチを開くと銃弾のような豪雨の洗礼が待っていた。天空を黄金色の稲妻が幾筋も駆け抜けている。暗雲は呆れるほど分厚く、それ自体が生き物のようにうごめいていた。夜海は崩れ

ては消える巨大な水の壁を際限なく作っては自身の力で粉々に破壊している。

急傾斜となった甲板の手すりに懸命につかまっている船員が何かに向けて片手を伸ばしていた。手すりの支柱に引っかかった救命胴衣だ。つかむことには成功したが、着ようとしたところで船員は突風にあらわれて吹っ飛んでいった。暗黒の海に向こう側へ。断末魔の叫びも聞こえなければ着水音も聞こえなかった。

暴風の風鳴りは誰かの雄叫びのように聞こえた。神々の雄叫びだと誰かに告げられれば信じてしまいそうだった。

ぐるりと周囲を見渡す。荒れ狂う海、切れたワイヤーが垂れた甲板、白波が顔を出す欄干、黒色にぬり潰された無人の船楼。

俺たちよりも先に出たはずの乗客の姿はなかった。人気がどこにもない。誰もいなくなった。

呼吸が止まりそうになっている——精神を落ち着けるために横壁に握り拳を打ちつけた。恐怖で感覚が鈍化しているのかこれっぽちも痛みを感じなかった。

どこからかバリバリと繊維が引きちぎられるような破壊の音が響いてきている。ゆらゆらとしていた舳先が前のめりになり、船尾が後ろに下がってきている。俺の乗ったこの船には僅かながら二つの傾斜ができている。船体は崩壊して間もなく割れて沈むことに疑いはない。

空から飛来する無数の死の呼び水が俺の肉体と精神を叩きのめそうとしている。膝をついて神に祈れば多少の慈悲はあるのだろうか。死ぬときはこのようにして死ぬのかもしれない。

「どうするヒロト」

唐宮の声が空虚だった。それでも暴風雨の中にあつてもはつきりと聞こえた。

白く染まりそんな思考を否定した。俺の祈りなど神に届くはずがない。天は蓋がされていて誰の叫ぶ声も届かない。

唐宮に顔を近づけた。お互いにずぶ濡れで瞳を合わせた。唐宮は俺の判断に望みを託していた。活路を探すしかない。ただ生き延びるために。

「この船はもう終わりだ。救命ボートに乗るしかない」

「どこにある？」

発見までにそう時間がかからなかった。金具で床に固定されたカプセルボックスがばかりと開いているのを視界に捉えた。ベルト帯が船べりに落ちて伸びている。荒波によって坂が変化する甲板の機を狙い定め、滑り台の要領で尻から移動する。

海面に続くのはこの下に先客の姿があった。

ゴムボートは圧縮から解き放たれて広がり、救命胴衣を着込んだ二人の女がベルト帯の着脱に手間取っていた。必死になって取り外そうとしているが頭が回っていない。あの形状ならボタンをスライドさせるだけで簡単に外れるが、まだ外れてもらっては困る。

「先に行け！」

怒鳴るように促すと唐宮は迅速に行動した。はしごを数歩ほど降りれば途中でジャンプする。

足場の不安定さから着地で体勢が崩れてよろめき、ゴムボートから海にずり落ちそうになりながらも、唐宮はベルト帯を手中に収めた。

二人の女がもぎ取られたことに対する怒りと解除への期待に満ちた視線を混ぜ合わせて唐宮に送った。

「ヒロト！」

叫ぶ唐宮の要請にすぐに応じようとしたが、気配を感じて横に顔を向けた。

いつの間にか——純白の雨合羽を着た小柄な人影が傍にきていた。あらゆる悪条件にまみれた嵐の海だというのに身じろぎしていなかった。

目深にフードを被り、口元だけが露わになっている。口の端が緩んでいて、笑っているようだった。まるで物珍しいものを見物するように。

異様だった。

醸し出している雰囲気やあまりの場違いな存在感到亡霊かと錯覚した。俺はくだらない馬鹿げた妄想に支配されて硬直してしまった。

フードが強風に吹かれて後方へばさりと飛んだ。風を受けて乱れ散る黒髪と琥珀色に輝く瞳が姿を現す。あどけなさを含む顔立ちの少女だった。

頬の線はほどほどに丸く鼻筋もすつと通り、垂れ気



味の目は大きく愛嬌がある。やや痩身ではあるが、たおやかな身体の線は柳のような粘り強さを感じさせ、色白の肌には張りがある。

真正面から向かい合っていると、困難などひとかけらも感じていない涼しげな少女の表情が和らいだ。柔らかに、何もかも包み込むような鮮やかな微笑だった。「私も乗せていただけますでしょうか？」

よく通る耳心地のよい声音が鼓膜を刺激した。彼女はゆっくり手を差し出した。この状況とは不釣り合いのダンスに誘うような優雅な振る舞い。

雷光の瞬きが素顔を鮮明に照らし出す。目の前に居るのは年頃の娘にすぎない。同時に耳をつんざく雷鳴が響き渡り、俺は夢から解き放たれて正気に戻った。口を開こうとしたがうまく何かを言えなかった。

だからか、その可憐な小さな手を握ったりはしなかった。俺にできることは一つだけ。

「うきやつ！」

手首をつかんで強引に前に引っ張り、背中にも手を回して脇に抱え込んで有無を言わず運ぶことだ。小柄

だったおかげで重量は大したことはない。この方法なら確実に救助できる。

雨風に耐えながらはしごを降り不安定なゴムボートに着地し、少女を叩きつけるように地面に転がした。カエルが潰れたみたいな悲鳴がしたがどうでもよかった。

足を突っ張ってボートにしがみついている唐宮が気に入らない土産を見たような面をしていた。

素早くベルト帯を外した。海原にボートが放り出されて不規則に回転する。俺も腰を落として足を突っ張った。

「可愛かったか？」

「面なんて見てねえよ」

俺は嘘をついた。嘘をついたが、本当のことは言いたくなかった。この急場で女に見惚れたなど口が裂けても言いたくはなかった。

俺は誰かを好きになった経験などない。自分自身すら吐き気がするほど嫌いだった。



## 第一章 孤島混生

汗まみれの額を手の甲でぬぐった。指先から汗が滴下する。天空にそびえる太陽は地表にいる生物を焼き殺しかねない灼熱の光線を放出している。

耐えがたい酷暑のせいで脳みそが茹つている。けなしの氣力が汗と混じって流れ落ちていく感覚があつた。

こういうときは何も考えたくはない。だが、何も考えないわけにもいかない状況に俺は陥っていた。

「悪いんだけどさ、境界線を決めるべきだと思ふの」  
吊りあがつた目元にはしわができて険が生まれていた。唇はわななき、眼球が微動している。怒りの臨界点を越えてヒステリーを起こしかけている。

挑むように食いかかつてきたのは遭難者の一人である茶髪の女だ。不機嫌さを隠そうとせず、片手を腰にあてて無遠慮に俺の胸を指差してきた。

腰元まで伸びて広がる茶髪は砂にまみれて輝きを失

っていた。ハイビスカスの刺繍で飾られたダークトーンの半袖ワンピースは海水を含んでいるせいでたるんでよれ、枯れ花のように見える。

靴の中に入つた砂利が妙に氣になった。陽光によって温められた熱砂が不快だった。

あれほど望んでいた広大なエメラルドグリーン的大海と驚くほど白い砂浜が憎悪の対象になつてきている。

自然に満ち溢れた美しい孤島は世界で一番くそつたれな場所に思えてくる。

——島に漂着して二日目の朝。

流れ着いたときの全員で手を取り合つた喜びは影も形もない。

助けを求める先はなく——島に人の姿はなかった。嵐を乗り越えて生き永らえたと思えば新たな辛苦が待ち受けていたなど誰も信じたはずがない。

目下、茶髪女の望みは大地に境界線を引き、自分らの領土を決めることだ。その領土に俺は必要ない。つまり、窮地に陥っている俺たち五人の遭難者の仲間割れがお望みだ。



唐突に——ぐいっと肩が引かれた。のけ反りながら頭だけ後ろを振り向く。

毛先が尖った金髪の髪房を散らばらせ、ダメージジーンズと十字架のシャツを着た端正な顔立ちの男が眉をしかめている。

砂浜に転がっていた使えそうな漂流物を集めていた唐宮丈——ためらいもなく俺の前に出て茶髪女と対峙した。

困った顔を全面に押し出し、身振り手振りでなだめすかそうとし始める。

「ちよっと待ってくれ。分かれるのは非効率だし、危険も高まるだろう」

「あんたたちと居た方が危険だつてことに三人で結論を出したの」

「この状況をわかってないんじゃないか。俺たちは集団で行動すべきだ。食料のこともある」

「あたしたちのね。元々、最初にボートを見つけたのはあたしたちよ。あたしたちが手に入れたボートにあった物よ」

ぐっ、と喉をつまらせて唐宮は顎を引いた。

茶髪女は一步も譲ろうと思っていないはずだ。高慢な勝ち誇った顔つきからそんな内心が透けて見える。

唐宮は目尻を痙攣させながら絶句した。ここまで強い態度を取られると思っていなかったに違いない。

俺は後方で黙って成り行きを見守っていた。単純な肉体疲労と不眠からくるだるさもあり、しゃべる気にもならないこともある。

「こっちはなるべくじっとして……救助を待つことにしたわ。冒険好きのあんたたちには付き合ってもらえないの。大体、森の中に入って動き回るなんて危なかったのよ。蛇に襲われかけたし、ヒルにも噛まれた。ろくなことはなかったわ」

これ見よがしに茶髪女は俺に視線をぶつけてくる。

昨日の周辺探索を提案したのが俺だからだ。住人一人でも見つければ俺たちの危機を伝達することができると思ったし、せめて人工物の存在を確かめるためだった。

道なき密林を女たちに歩かせたのは確かに過ちだった。

た。全員で移動すべきではなかった。役割分担も考えずにただ成り行きに任せるまま集団行動した結果、このありさまだ。

指摘は細長い棒で突かれたように胸にくる。憤りとも後悔ともつかない不明瞭な感情が押し寄せてきた。

唐宮は怒気を押し殺そうとして失敗している。僅かに開いた唇から歯が噛み締められているのが見える。身を焦がす感情のためにやけを起こしかけている。

今回の軍配は自制心にあがった。深呼吸した後に両手を交差させて空を切った。

「……わかった。別行動なら分配を決めよう。まさか全部そつちで持つていくほど悪魔じゃないだろう」

「そうね。でも、あたしたちが弱い女の子だつてことを忘れないで欲しいわ。紳士らしく行動してね」

鼻で笑って言い捨てて、茶髪女は踵を返した。

その背中を剣呑な目で睨みながら唐宮はジーンズのポケットに手をつっ込んだ。ポケットの膨らみにあるものを強く握り締めている。

それがジャックナイフだとわかつていたので肩を叩

いて振り向かせた。俺の目を見て唐宮は僅かに顎を引く。ポケットから手が離れる。

「悪い。俺のせいだ」

「ヒロトのせいじゃないさ。探索する必要はあった。おかげでここが最高のリゾート地だつてわかったからな。なんせ、スタップが完全に気配を隠してるんだ。まるで誰もいない島みたいだ。ロビンソンクルーソーゲームができるなんてパンフレットには書かれてなかったから別料金を取られるかもな」

黙ったまま愚痴を聞き続けた。俺にはそうすることしかできなかった。

高校生活の終わりを告げる卒業旅行は完全に破綻した。記念すべき初めての海外旅行は地獄のような船酔いにさいなまれたことからスタートし、水死と隣り合わせの災害鑑賞ツアーを体験し、現在では完璧なる自給自足の宿泊生活を強いられている。

見事なラインナップだ。最高すぎて笑いがこみあげてきそうだった。だがこれっぽっちも笑えない。

救いがあるとしたら俺一人だけではなく、それなり

に氣心の知れた唐宮と一緒にということだ。

ともにゴムボートに乗って海を漂った女三人とは面識がないし、このように友好的な雰囲気でもない。

今だって浜辺で五人で集めたはずの漂流物を勝手に動かしているし、話し合う素振りもない。

野放しにされているサバンナの肉食獣を眺めるように警戒心たつぷりで俺たちを窺うのみだ。

仕方がない——こんな人気のない場所ので体も知れない男二人が固まって密談したりしている姿を見れば不安に思うだろう。

女の身になって考えてやるべきかもしれない。

「さて問題だ。あのこうつくばりの三人から食料と水を奪うにはどうしたらいいと思う？ 俺は一人をぶん殴っちまうのがいいと思う。そうすれば後の二人はびびって動かなくなる。コツは無言を貫くことだ。クールにいこう」

「暴力はやめろ。あのボートに乗せてもらったのは素直に助かったし、無理に食料を奪うのは気が進まない」  
「そうだな……なあに、変質者扱いされただけだ。指

一本も触つてないし、セクハラ発言すらしていないのにゴミを見るように見られてるが、もう一度頑張つて話してくるよ。人間の姿をした悪魔と交渉ができるなんてパンザイしたい気分だ」

皮肉を口走りながら唐宮は重ねた指を二本振つて、女たちのもとへ歩いていった。

一言、二言、会話している姿が見える。

茶髪女が前に出て、その後ろに控えている女二人は様子を窺っているのか物静かにしている。

片方は小柄でどこことなく愛らしい顔つきの少女。黒髪を肩まで伸ばし、先端を内側に向かって僅かにカールさせているポプカット。表情に疲れはなく不思議とリラックスしていて、淡々と成り行きを眺めているように見える。

一人だけ腰を下ろし、何が楽しいのか両手を砂浜につけて足をぶらぶらさせている。中学生くらいかもしれないが活発な印象を受けた。嵐の中で見た超然とした態度が嘘のように子供っぽい。

もう片方はモデル並みに長身でウェーブのかかった

長髪が鮮やかな色つばい美女。交渉がどう進むか気になるのか交渉している二人から距離が近い。顔つきは真剣味がある。年齢は俺よりも二つか三つ上。化粧と身なりからして恐らく社会人か大学生といったところか。落ち着き払っており若干冷たい印象を受けた。

唐宮はへらへらと軽薄そうに笑い、爽やかな表情を取り繕っているが内心はブチキレている。

つま先で砂を蹴飛ばして、イラ立ちが隠せていない。よほどのことがない限りは女に暴力を振るったりしないはずだが目を離すわけにはいかない。

戻ってくると、五百ミリサイズのペットボトル二本と外国語で書かれた缶詰らしき物を二つ両手で抱えてきた。

能面のように無表情だったのは気になるが上出来だ。

「十万だ」

「うん？」

「あの茶髪、帰ったら十万払って言ってきたよ」

呆れて苦笑いした。この状況で金儲けに走る根性を褒めてやりたい。どういう神経なのだろうか。図太い

ことだけは確かだが……いや、単に難癖つきたいだけか。

「それは……ああ、俺が払うよ」

「馬鹿なこと言うな。本当に払ってたまるかよ。だがもしも、一週間以内に救助が来なかったら俺はあのクソ生意気な女を犯す。止めんなよヒロト」

「止めるよ。お前には彼女がいるし、人間性まで遭難しちまう」

唐宮は視線を横に向けた。波飛沫の舞う透明な海の方へ。少しばかり思い悩むように考えたような間があった。

状況を飲み込むために心に整理をつけているのか、或いは何かを天秤にかけている風だった。

「冗談だよ……そうだな。病気をもらうかもしれないしな。スーパー淋病って知ってるか？ ああいう女みたいな凶悪な菌だ。国の医療機関に相談しなきゃいけないほど厄介ってことだよ」

「水がある。森に探しに行こう」

「サバイバル生活の始まりだな。あるのはナイフ一本

だ。わくわくするあまり自殺したくなってきたよ。こういう状況に陥ることを空想したことはあるが、ヤシの実はどこにあるんだ？　まず実感するためのトロピカルジュースが必要だ」

砂浜にはヤシ科の植物は見当たらない。少なくとも目視できる範囲には。

東南アジアはヤシの実から抽出できるショートニングの原料——パーム油の名産地なのだから、あつてもおかしくないはずだが。

顎をあげると熱い吐息が出た。気温は神の正気を疑うほど高い。からつとして熱い空気が全身にあますことなくまとわりついている。

地理的に考えるならばサイパンを指していたのだから小笠原諸島よりも南に位置していて、熱帯のエリアになる。

死ぬほど流されたと仮定して北マリアナ諸島の一つか、或いは硫黄島周辺か——なら自衛隊基地の一つでもあればいいし、派手な訓練でもして存在をアピールしてくれば俺たちも叫びがある。

「ヤシの木に登って死ぬ奴もいる。あつてもリスクが高いから後回しだ」

「ヒロトさ、サバイバル好きなのか？」

少し考えて、答えた。

「誰かがやるのを見るのは好きだった」

「同意見た」

砂浜から森へと移動する。

壁を思わせる原生林は鬱蒼と生い茂っていて、奥は昼間なのに暗闇に染まっている。

まるで侵入者を拒むように隙間は少なかった。

水分が必要だった。何にもまして喉が乾く。

照りつける太陽の陽射しと、漂っているむわつとした熱気は滝のような汗をかかせてくれている。

衣服はべたつき、顔は熱くなる。思ったより森は歩きにくく体力が削られる。地面からひり出した太い根が足首を必要以上に持ち上げることを要求してくる。立ちほだかる密集した低木群が織りなす小枝は剣山のようにトゲトゲしい。曲がりくねる細い獣道の道幅は



最悪なほど狭く、迂回ばかりしている内に方角を忘れそうになる。

早急に救助隊を呼びたいものだ。頼れるはずだった携帯は圏外。基地局が設置されていないほど未開の地なのかもしれない。

開けた場所で足を止めて小休憩する。俺と唐宮は目を皿のようにして周辺に探りを入れる。看板、道路標識、アウトドア用品や雑誌、ペットボトルや空き缶、人の手で切り倒された丸太——なんでもいいから人類の痕跡を見つけたかった。何一つとして見つからない。

落胆で気を緩めればテレビで見かけるようなジャングルの南国情緒に気疲れとも感嘆とも取れるため息がこぼれた。恐ろしいほど緑は濃い。俺の胴体よりも大きな葉がカーテンのように並び、頭上では二の腕ほどの太さのツル草が木と木の間をロープのごとく伸びている。

普段過ごしていた日常とはかけ離れた風景。これが夢ならどんなにいいか。だが、カラフルな尾羽を持つインコの気味の悪い鳴き声が現実だと教えてくれる。

「すげえなあれ、絵の具ぶっつけたみたいな色してる」

「そうだな」

軽口を叩いて強がってはいるが唐宮は身体が重いのだろう。動きに精彩がない。俺もろくに眠れていない。体調は優れないはまだ。

昨日の晩は砂浜の近くの木陰で横になって眠ろうとしたが——得体の知れない虫や鳥の声がうるさく、真夜中でもずつと響いていたせいだ。

服を脱いで下敷きにしたがあらゆることを虫に刺されて湿疹だらけにされた。ヒルだけでなくダニやノミも皮膚を狙っている。都会育ちの柔肌を持つ俺たちは彼らにとつてさぞやいいご馳走だろう。

「ところで、どうする？」

「定番だが枯れ木を集めて燃やそう。誰かが見つけて寄ってくるか通報するはずだ」

「ここらの小枝切っちゃおうか」

「後なら煙が出るからいいが、最初に生木はダメだ。燃えにくいし、無理してそのナイフが欠けたり折れたりするのは困る。折るなら手で折れ」

「水はどうする。あと一リットルしかない。おっと、  
たった今、八百になった」

ぐびりとペットボトルをあおった。喉が上下した。  
呆れそうになったがこの暑さだ。飲まないわけにもい  
かない。熱帯における季節は恐らく雨季寄り。湿気で  
満ち溢れる空気が蔓延している。

飲まなければ脱水症状に簡単にかかってしまうだろ  
う。

「一般的なのは布で朝露や夜露を集めるか、泥水をろ  
過して飲むか、海水を蒸留するか、植物からしぼり取  
るか、お前の意見を聞こう」

唐宮はもったいぶって腕組みした。

「定番だが水道の蛇口を探そう。ここがテーマパーク  
ならあるはずだ」

「そうなると俺たちは無断侵入者だな」

「早いとこ逮捕して欲しいな。俺たちが干からびてミ  
イラ男に変身する前によ」

「なら念のための身体に巻く包帯も調達しないとな」

軽口を叩きながら俺はしゃがみこんで近くにあった

倒木を撫でた。

むき出しの幹は変色して全体が白く染まっている。  
両指で摘まんでみると樹皮の繊維は朽ちて粉のように  
さらさらとし、指の間からこぼれ落ちた。腐敗して空  
いただらう穴に小枝を突っ込むと手ごたえがあった。

「こいつは……食糧になるかな？」

枝の先端に絡まって身をくねらせる白い芋虫を凝視  
すると、唐宮は物凄く嫌そうに喉を鳴らした。

「いきなりベリーハードだな。俺はゲームはイーजी  
からやるタイプなんだが」

「これは分かれ道だ。これを食うか、食わないかで俺  
たちの今後が決まる。食えれば食料の幅が広がるし、  
生存確率はあがる。いきなりきついのを体験しておけ  
ば後が楽になるはずだ」

「待て。その理屈はおかしい。最初は果物を探そうぜ。  
普段食ってる物と似た物を探すべきじゃないか。いく  
らなんでも……おいおい」

しゅんじゅん

逡巡したが、口の中に芋虫を入れて噛み砕いた。悲  
鳴をあげそうなほどの酷い味だった。固い皮を切り裂

くとネバネバした苦味のある体液が舌にまとわりついてくる。ぬるくて妙に生温かく、口内でうねうねと動き、どろっとした塊が菌に触る。飲み下すと涙が出そうだった。

食ったのは甲虫種、恐らくはカブトムシかクワガタの幼虫だ。詳しい種類はわからないが始めの一步は最悪だ。

「味はどうだよ原始人さん」

「耐えがたいほど苦痛の味がする。だが、簡単に手に入るタンパク質だ」

「芋虫は甘いつて言つてたテレビは嘘だったんだな」

「腐葉土が主食の芋虫の体液がどうしたら甘くなるんだ。そういうのは果実の中にいるんだよ」

納得したのか唐宮はペットボトルを差し出した。すげえと言いたいのだろうが拒否した。

こんなことでいちいち水を飲んでいたら足りなくなる。手にくっついた黄色い粘液を手ごろな葉に擦りつけてぬぐう。

ポーチに五匹の芋虫と朽ちた樹皮や木粉をつめ込ん

だ。助燃剤として乾燥した細かい粉は優れているし、焼いたり蒸したりすれば味も変わると期待した。

再び獣道を歩きながら先へと進む。

夏ということもあつてか森の緑はやや青々しい。咲く花のつぼみや花弁は日本では見かけないどぎつい配色をしている。

熱帯か——上空を太く大きめのクチバシをつけた黄緑色の鳥が飛びかっている。目玉の大きな小猿が俺たちを見つけて驚いたように瞬きしていた。肉食獣の足跡は今のところなし。

顔にかかつてくる大葉をツルごと払いのける。今のところ文明の気配はない。拠点となる廃屋でもあればと期待したが外れた。

三十分ほど歩いたか——途中で高くそびえる岩壁に出くわして先に行けなくなった。

見あげる首が痛くなりそうなほど高い。岩棚の突き出した反りやスプーンでえぐられたような窪みが数多い、命綱があつたとしても登ろうと思わない難所だ。痛む後ろ首をぼんぼんと拳で叩いて正面を見直すと

地上と崖の境目に違和感。ゴツゴツとした岩肌の溝の一つが黒く変色し、苔むして湿っているのを発見した。「登るか？」

唐宮が冗談めかして言った。頭頂部には茂る緑があり、樹木の姿が見え隠れしている。

「島の周辺に何があるか登ればわかりそうだが、登るのは崖じゃなくてもいいかな」

薄い層になっている苔を剥がした。年月によつて変色した黒い岩肌が現れる。ポケットからハンカチを取り出してそこに押しつけた。じわじわと濡れてシミが広がっていく。数分ほど待った。顔の上に持つていき、ハンカチをしぼつて水滴を舌で受け止めた。

「ヒロト、まともな水はまだあるぞ」

「いいんだ。だけどそっちじゃない空のペットボトルが欲しいな」

これが本当に岩清水なのか、或いは雨露が流れてきただけなのかはわからない。それほど味に濁りを感じないので不純物が少ないのは確かだ。内部で循環され、ろ過されているのかもしれない。

「なあ、サバイバルなんてマジでやる気か？」

「念のためだ。ヤシの実とか小川もまだ見つかつてない。木の実やキノコはあったが食えるかわからない。動物も捕まえられるかわからない。今、俺たちは思っているよりもやばいんだ」

「なんとかなるだろ。あの淋病女は厄介だが、他の女を俺が口説いてなんとかできる」

唐宮は見た目美しい美男子には違いない。異性に無条件に好かれる才能を持ち、その力を濫用することにしためらいなどなかった。

嫉妬と羨望が混ざつて苦い味となつて心に沁みてくる。だがこの味にはとうに慣れた。別に唐宮にだけ抱いた感情というわけでもない。

ボートに積み込まれていた飲料水と保存食のつめ込まれた木箱。非常食の類は喉から手が出るほど欲しいすべてを把握しているわけではないが、量はそれなりにあった。

毎日三食としても五人で一週間は持つだろう。救助隊が来るには充分すぎる時間だ。航路からゴムボート

で外れた距離なんて大したことはない。狼煙のろしさえあげれば救助隊がきてくれるはずだ。

「大学の推薦入試取り消されねえかな」

ふと現実に戻ったのか唐宮の心配事に噴き出しそうになった。

「海難事故は失態には入らないだろう」

「俺はサッカー入試なんだよ。遊んでるってバレる」

「発展途上国にボランティアに行く途中でしたって言えばいいさ」

「素晴らしいアイデアだ」

ハンカチに小石を置いて固定し、先端をひねって結露した水滴が下部に設置したペットボトルの口に落ちるようにした。細工は心もとないが現在ではこれが限界だ。

「なんでもいいから水を集められる器が欲しいな。木桶でも作るべきか」

「水ってそんなにいるのか？ よくあるあれだよあれ。穴を掘って海水を蒸留するだけじゃ足りないか」

素朴な問いだった。水分が不足する状況が想定でき

ないだけかもしれない。

穴を掘って土を湿らせ、ビニールを張って太陽光で海水を蒸留させ真水を手に入れる手段は悪くないが、よくもないだろう。面積が狭ければ入手できる水の量も比例して少量だ。男二人分の一日の水分を獲得するには難しいし、天候にも左右される。

「当たり前だ。一日二リットルはいるって言われてるくらいだ。この気温だしもつという」

「ふーん……なあ、お前ってまだ童貞だよな？」

「分かれて行動するか」

「おいおいおい。落ち着けて。状況を整理しようぜ」  
「一応は最低限の水の確保と枯れ木の確保は終わった。火を熾もすのは苦労しそうだが、助燃材も手に入れたしなんとかなると思う。寝床の製作も試してみる。もつと食料になりそうな物も集めよう」

「そうじゃなくってよ」

ぶらぶらと手を振った。試すような目で俺を見ている。

「あの三人の内、どの女が好き？」

「あ？」

「淋病とポインとボブだよ」

茶髪女のあだ名が残り二人と比べて酷すぎる気がしたが、心情は察してあまりあるので責める気は起きなかった。

「俺さ、こんなやばい状況でも色恋沙汰を考えられるお前を凄いと思うよ」

ここがどこかもわからず、明日もどうなるか不明な状況だというのに女のことを考えるなんて気が狂っているとは思えなかった。

楽観視するのはいいことなのか、悪いことなのか、判断がつきかねる。

「筋を通したいんだよ。つまんねえ喧嘩したくないだろ？」

何かしらこだわりがあるのか唐宮は引き下がる気配を見せなかった。

蒼空を仰ぐ。何かに向けて強く祈りたかった。ことなくだらないことを話してる暇があれば一刻も早く救助信号の一つでも作っておきたかった。

それでも、言われるままに赤の他人三人の顔を思い浮かべた。

——勝ち気な目つきで恫喝してきた茶髪の蓮っ葉な女。

——フェラガモの高級靴とエルメスのバックで身を固めた鼻持ちならない美女。

——死がばらまかれた嵐の甲板に悠然と立っていた動じない少女。

三者択一ならば——最後の少女が一番印象に残っている。

心を打たれたというよりも、握り締められたといった感覚が正しいかもしれない。知らず知らずに苦境を恐れぬ精神への憧憬を抱いたのかもしれない。

これが惹かれるという感情ならば選択は一つだけ。

「ボブの娘だ」

「ボブだな。オーケー、ロリコン野郎。そういう方向でいくぜ」

「お前、彼女いるんだろ」

「だから？」

レストランでどうしてサイドメニューを頼まないんだ。そう言いたげな視線をぶつけられ、何も言えなくなつた。

※ ※

灯向<sup>ひむか</sup>赤音<sup>あかね</sup>には根暗と金髪は森に入つたのが愚かな選択だと思えなかつた。

毒蛇や毒蜘蛛に注意と書かれたパンフレットを見なかつたのか。熱病に罹<sup>りな</sup>患する可能性を忘れたのか。森林に入ることの危険を承知しているのか。

昨日——つい、誘いに乗って人家を探す目的で探索したが無駄骨だつた。あてのない森歩きなど無謀なだけだと思つた。

食料も金髪が馬鹿食いするし、視線もいやらしくて太ももや首筋、胸部を舐めまわすように見てくるので背筋がぞわりとした。おかげで汗まみれになつて満足に着替えられない。

高圧的な態度で接することどうまく分かれることが

できてホッと胸を撫で下ろした。

赤音は動かないことを選んだが、単に思考停止しているわけではなかつた。

海岸の日陰を陣取って、通りかかる船を期待したので。手には発炎筒がある。これをかざせばすぐに救助されるはずだ。

砂浜には五人で設置したSOSの文字もある。枝と石で作つた。目立つところにおいて、なおかつ消耗しないように日陰で大人しくしているのは決して悪い選択肢だとは考えなかつた。

食料も豊富にあるし、飲料水もある——当面、問題はないはず。

「シャワーが浴びれないのが辛いところね」

エルメスのバックのがま口を開けては閉じるを繰り返していたルナがぼつりとつぶやいた。化粧品の傷みを気にしているのか、香水の瓶を取り出して成分表を凝視する。

赤音は何気なしに相槌を打った。

「そうね。暑いし雨でも降らないかな」



「からつとしても暑いですねー」

樹木の根元に頭を置き、寝そべる美<sup>み</sup>菜<sup>な</sup>も陽気に同意した。

同じ話題。同じ不平不満を繰り返しているのは誰もが自覚していたが、三人ともおしゃべりをやめなかった。赤音からすれば不安からきた口数は多い。沈黙は得も知れぬ恐怖を突いてしまう。

自己紹介は終えた。三人とも面識のない見知らぬ他人ではあったが、それぞれ用事があってサイパンに行くはずだった。

ルナに至っては沈没するときに同行者が海の中に消え失せたらしい。それなのに彼女の顔にはそれほど悲しみの色はなかった。

口にするのも現状への憤りだけで、赤音は男との望まない旅行だったのだと邪推した。ルナが水商売の気配を醸し出していることも裏打ちとなっている。

明度の高いマニキュアや口紅。グラデーション柄のドレスも胸部を強調する形をわざと取っている。意識的にしろ、無意識にせよ滲み出るのは誤魔化せない。

「私、一日にシャワーを二回浴びるの。こういうのって耐えきれないわ」

「私は一回ですねー」

「あんまり浴びすぎて、脂分が飛ぶのはよくないって聞くけど」

「こう言っちゃなんだけど、どのくらい賠償金取れるかしら。救いがあるとしたらそれだけだわ」

「ふんだくれるんじゃないですかー」

「旅行会社の保険があるからたつぷり取れるんじゃない？」

下世話な話で盛りあがった。これで船舶の汽笛でも聞かえれば最高の気分になれるはずだったが、潮騒のざわめきしかない。

広大な紺碧の海は透明性が高く——陽光が乱反射してため息をつくほど美しい。

ゴムボートで移動したときにサメの尾ビレを見かけなければ今頃、のん気に泳いでいたかもしれない。

最低限の洗い物をしたり、身体を洗ったりするときに浅瀬に入るが塩分を含んだ海水が衣服にいい影響を

与えるはずがない。

「男の人は元気ですねー」

美菜が遠くの浜辺に顔を向けた。男二人が拳大の石を海面に投げつけていた。奇声をあげながら水飛沫を浴び、悪ふざけからか身を投げて泳いだりしている。

口を半開きにして赤音は顔に手をあてる。見てられないという風に。

「あの二人は頼りにならないわよ。男はああいう馬鹿なのよ。ほっときましょう。何か言ってきたても無視して」

「本当に食料をもうあげないの？」

ルナの声は心配するというよりも念を押すようだった。自分たちが我慢を強いられていて、あつちが遊んでいる。そんな憤怒がちらついていた。

力強く赤音は頷いた。

「勿論よ」

「暴力できたらどうするの？」

赤音は脇に置いた荷物からハサミを取り出した。口の端に笑いをのぼらせ、半ば悪戯っぽくかちやか

ちやと刃を交差させる。

「正当防衛よね」

「そうね」

「救助されるまで仲良くした方がいいと思いますけどねー」

美菜の声は虚しく響いた。元々、気のない棒読みのような相槌ばかり打っていた。

本人もそれほど強く望んでいないのか。後頭部に両手を回しながら、どこか上の空でのお気楽な発言だったが——ふっと男二人に目を落とし、感心するように頷いて頬を緩めていた。

※ ※

島に流れ着いて三日が経過。

ジェット機が上空を雄々しく飛ぶ姿は見かけたが肝心の救助隊が現れる兆候はない。日増しに焦燥感が姿を鮮明にしていく。

生活資源の獲得のために慣れない労働に打ち込む。

足がむくみ、腕が突つ張る。身体の調子が悪くなっている。ストレスを含め、何かしら身体に必要な栄養素が不足しているせいだと推測する。

ここ数日、悪天候が続いたことも災いしている。大雨が降れば移動が困難になり、海が濁って海産物も獲ることが難しい。

本日の世知辛い収穫が焚き火にあぶられている。デイナーは大ムカデと黒の斑点模様がついた黄色のカエルとイワシみたいな小魚だ。素晴らしいほどしみたれた食事になりそうだった。

「すげえうまそうだな。やべえ、腹がいっぱいになってきたよ」

「俺もだ。この食事にはダイエット効果があるな」

「ああ、俺に遠慮せずたらふく食ってくれ」

「いいからお前も食えよ」

真っ黒でおどろおどろしい外骨格を持つムカデは当然のことながら強硬に反対されたが、食ってみてから判断しようと俺も押し切った。

毒の懸念もあるが火を通せば食べられなくもないは

ずだ。中国かどこかの国で串焼きを屋台で売っているのをテレビで視聴したことが根拠だ。実に最低の根拠だがすぎるしかない。

俺は手を伸ばしてムカデを噛みちぎった。味は最高に悪く、誰かに勧められれば人によつては怒りを禁じ得ないだろう。感想としては苦い縄跳びの紐だ。

「気遣いなんてしないでいいぞヒロト。今日は一日雨に降られたり、かと思えばきつい陽射しを浴びたりでほぼ動かなかった。俺の光合成は完璧だ」

「お前のどこに葉緑体があるんだ？」

「トランクスの下だよ。生命力がみなぎってる」

「面白いな。お前は緑色のブツを持った世界で唯一の男だよ」

ムカデを咀嚼し続ける。黒い甲殻が割れてどす黒い体液が口の中にずると流れ込む。外皮はパリパリとしているが異物感を覚えるほど硬い。

まずい。まずいことは許容できるが臭気は誤魔化せない。臭みを消す香辛料が欲しくなる。懦弱な心がどこにもありはしない物ばかり求めようとする。

まともな物はもうない。食糧を分けてもらえたのは最初の一回だけだ。それならそれで仕方ないと折り合いをつけるしかなかった。

唐宮は小魚をゆつくりと噛むだけで、カエルには手をつけようとしなかった。思った以上に普段食べないものを口にするのを忌避している。

たった三日で頬がこけ始めている。血色は悪くなり、体力の衰えがちよつとした仕草に如実に表れる。

定番として熱帯特有の果物を求めなかったわけでもない。

森林の中を探索すれば色鮮やかな果物が周辺の木々に実っているのは確認できた。そしてブドウに似た果実を一つを食べてみたらいきなり腹痛を起こして倒れそうになった。

安易に口に入らず、慎重に食料を定めなければならぬ。実験と試行錯誤を試みなければならぬ。猛毒に直撃したらそれだけで終了だ。

収穫物は串焼きにするのもよかったが石焼きにすることにした。その方が保温性もあり、すきつ腹を誤魔

化するための長い食事を続けられる。

サバイバル生活で工夫は大事だ。そんな当たり前のことを痛感する日々となっている。

巨樹の枝葉を雨よけの庇にして座り込み、小枝を削って格子状に重ね、ツルで結んで小型の漁網も試作した。細工に集中していると現在の酷い状況も忘れることができる。現実逃避の一貫みたいなものかもしれない。

「ヒロト。お前の悪食には恐れ入ったよ。俺も積極的にブスに手を出して耐性をつけておくべきだったと後悔してる」

「見てくれだけで判断するのはお前の悪い癖だ。このカエルを食ってみろ。きつとジューシーだぞ。鶏だ」と思い込めばチキンの味がするはずだ」

「自己催眠か。楽しそうだな……こんなにちわ、可愛いコケコッコちゃん。えっ？ 何？ 食べられるならヒロトがいいって？ どうして俺じゃダメなんだい？ ああ、変態の方が好きなんだね。わかるよ。君はいつも全裸で大きなお尻が丸出しだもんね。確かにノーマ

ルの俺じゃ露出プレイは付き合えないよ」

おどけてカエルを焼いた串を渡してくる。俺は無然として受け取った。好き嫌いはよくないが、無理強いにはさせられない。

爆ぜていく枝と漂う火の粉に目を落とす。火を囲っている周辺が鮮やかな橙色に染まる。この野外ならではのしんみりとした雰囲気は嫌いじゃない。都会の喧騒から解き放たれた自由がある。生活は不便ではあるが、こうしていると心が平面になってしまったような不可思議な心持ちになる。

木と木の間から見える海岸線に落ちゆく夕日を眺めれば時間を忘れてしまうほど美しい絶景だ。この島の自然は驚くほど多様性があり、一風変わった造形を持ちながらも色彩豊かな草花は見る者の情感を刺激する。眠る時間が近づいている。密林の中を生きる奇態な鳥獣の鳴き声が聞こえた。日頃の緊張と疲労のためか、単に慣れたのか夜がくるとすぐ眠るようになった。

寝床は近場にある高木が密集して人が動きやすい場所にした。他の候補地は幾つか検討しているが、過ご

しやすいところを今後も選んでいく。

ここは海辺から三十メートル。男女の境界線とした大木からは百メートル。生活のためのスペースは充分にある。

弾力のありすぎるゴムみたいなカエルの足を口に咥えてこわばった足を伸ばして揉みほぐしていると、唐宮が一方に視線を向けていた。

そこにあるのは闇に染まりつつある木立だったが、本当に見ているのは樹木などではない。

「どうした？」

「わかってるだろ。女が欲しいんだ」

唐宮が色を覚え始めたのは中学の頃だったか——自分の魅力に気づき、取り巻く環境に気づいた。容姿が優れていて運動神経がよければ女はどうにでもなった。唐宮と俺の付き合いは遠くなった、近くなった、もした。高校に入ってサッカー部に入学して近くなり、三年になって少しだけ遠くなった。

元々、この旅行は自分一人で行くつもりだった。巻き込んだのは俺だ。そう考えると胃が冷えて重くなる。

謝罪の言葉を口にしようとしたが、できなかった。取り返しがつくことじゃない。

「女か……そんなにいいものか。俺にはまだ理解できないな。女は俺を選ばないからな」

「誰もがお前に壁を感じたのさ。お前は常に見えないバリアを張っている。それに数学の方程式で目の前の女の体積を測ろうとしたりする。それが彼女たちにとってたまらなく不快なんだよ」

「クラス的女子を立方体に見立てて計測したのは一回だけだ。あれは過ちだったと認めるよ」

「やる前に自分でもおかしいと思わなかったのか？」

「誰だつてくだらないことをしたがるもんだろ。俺も例外じゃないんだよ。あまりイジメるな。反省しているさ」

「必要のない計算もそうだし、ムカデを食うのもくだらないよな。俺たちは我慢を強いられている。苦痛のせいで理性のたがが外れそうだよ。なあヒロト。いつまで保てると思う？」

「さっき食ったのはムカデの形をした漢方薬だと思っ

てる。良薬口に苦しだ。死んじまいそうなほどうまくいったよ。いつまでも理性は保て」

「難しいな。俺はきつくなってきた」

「明日には助けがくるさ。寝よう唐宮。いつかこの体験が笑い話になるさ」

話を打ち切るように葉を敷きつめただけの寢床に横になった。目を閉じると空腹が下腹を締めつけてくる。あれっぽつちじゃ足りない。

本格的な漁をしなければならない。或いは狩りだ。そうなると火を焚いて救助を訴える時間が減る。今までは第一に水分を得ること、そして探索と煙を出すことに重点を置いていた。考え方を変える必要が出てきた。

葉の柔らかい大葉を集め、丈夫でうぶ毛のないつるのツル草を編んでタオルケットのようにしたが肌触りは良好とはいいがたい。その内、寝具も改良したいものだ。

眠るための沈黙の時間が流れる。長くは続かなかった。背後で身じろぎする気配がした。

「明日さ」

間が空いた。

続くはずの言葉は宙に浮いていて、ためらっているような感じがした。平坦な声は空疎で感情が込められていなかった。

「食料を手に入れようと思うんだ」

意味することはすぐに理解できた。兆候はあった。散々、イラ立ちを隠そうともせずに女たちの恨み言を垂れ流した。何度か両手を合わせて頼みに行つてはにべもなく断られた。

逆恨みだと理性ではわかつていても感情のたぎりは収まらない。

なだめて、すかして、抑え続けることに意味があるのか——赤の他人の三人がどうなろうが俺の知ったことじゃない。

女というだけで護つてやる必要はあるのか。

最初に食料と水を発見したのはあの二人組で間違いない。だが、そもその所有権は船主の物だ。誰のものでもないはずだ。

生きるために奪つたところで問題ない——そう思いたいだけだ。

「手伝つてくれなんて言わねえよ。俺はフォワードだからな。ディフェンダーがいないとゲームにならないつてこともわかつてる。作戦も立てないとな」

奪つたとしても奪還されるかもしれないことを危惧しているのか、唐宮の声は段々と熱っぽくなつていった。

顔を見るために振り向こうとは思わなかった。振り向けばその憎悪の炎に燃える目に従つてしまうのが恐ろしかった。なんとしてもなだめなければならぬ。「明日の日没まで待つてくれ。お前向けのメシを手に入れるよ。食料獲得に重点を置こう」

「俺たちはやばい。わかつてきた。今日、木に登ろうとしたら意識して力を入れなきゃいけなかった。毎日三食食つてるあいつらに勝てなくなるかもしれない」

「勝つとか負けるとかじゃないだろ。落ち着けよ」

「だからお前はレギュラーになれなかったんだ。そんなんだから二年で辞めるはめになった。どうして学校



のテストに点数をつけてるのかきちんとわかってんのか？ 他人との差をはっきりさせて優劣を決めるためだ。優れた奴は羨望されて、劣った奴は軽蔑される。俺は二年のとき、サッカー部のエースの先輩に脅されたよ。引っ込んでろ、って文句と平手が一発プレゼントされた。俺は引っ込まなかった。スライディングであいつの骨をへし折ってやった。悪いと思うか？ 間違ってると思うか？ 俺は間違っていたとしても構わない。有名大学に行けるし、新聞で英雄扱いしてもらった。俺は勝つために行動しただけだ」

唐宮は正しかった。サッカー部時代の俺は最後までレギュラーになれなかった。

ひたすら練習しても無駄だった。歯を噛み締めてボールを蹴り続けても俺が観客を背景にしてグラウンドに立つことはなかった。

ベンチに座って手を叩いているのに嫌気が差して辞めた。遠征に行つて試合を応援することが無意味に感じた。サボる日が増え、チームメイトとの距離が離れていくのが手に取るようにわかった。

肺が握り締められたような息苦しさを覚える。呼吸が止まってしまいうだった。

俺は何も言えなかった。沈黙を嫌つてか唐宮は声を止めない。熱っぽくて敵愾心が溢れていた。逆に俺を説得しようとしていた。

「世の中の奴らは大なり小なり罪を犯してるんだよ。お前だってたまに悪いと思うことしてきただろ。そうだろう？ なんでそんなに腑抜けちゃった。こんな事態になつて怯えてるのか。お前はもつとしっかりした男だった」

「——唐宮、俺は」

「いや、わかつてる。失言だったヒロト。お前の顔を立てて明日の日没まで待つよ。理解してくれなんて思わないから、何もしないでくれ。俺の譲歩を裏切るな……それと、言いすぎて悪かった」

消え入る声。背中越しだが顔を伏せたのが肩の動きでわかった。

唐宮が先輩の骨を折つたのは本当だったが——ただ単に負けたくない気持ち先走つただけだと俺は信じ

ている。唐宮は昔から俺よりも優しい奴だった。

そのときの練習風景を俺は見ている。青ざめて立ちつくした唐宮の表情には後悔しかなかった。勝つために行動したならあんな顔をするわけがなかった。

折れた骨も足ではなく腕だ。手をついたときの体勢をしくじったからだ。

「俺もわかつてるさ……トイレに行ってくる」

上半身を起こし、靴を履き直して熾火となりつつある火から離れた。

暗闇へ身を躍らせた。目が慣れるまで待つていられず、物の輪郭だけを映し出す星明りさえいらぬ気分だった。

最初はこの未開の土地そのものを恐れたが地形がわかってくるとそうでもなくなつた。どこに何があるかわかれれば、恐怖心は薄れていくものだ。

樹木の前に立つて、ファスナーを下ろす。

強奪を選択しようとしている唐宮は生きるといふ観点からすれば正しい。俺は表面的な倫理に固執した臆病者なだけで、本当はあの三人がどうなつても構わな

いと心の隅で思っている。

なるべくなら——もう少し食料を譲ってもらうだけで穏便に済ませたい。懇願して、地べたに頭を貼りつけることもいとわない。

いつから俺はこんな骨なし野郎になつたのか——無気力で流されるだけになつたのか。いつからかはわかつている。考えたくないだけだ。

気が高ぶっているせいか、疲労のせいか、過去の記憶がよみがえってくる。

——お兄ちゃんは見せかけだけ優しいよね。

——誰かに優しくするのはさ、誰かを利用したいだけなんだよね。

——本当は酷い人なのにイイ人の振りをするのやめなよ。

妹が、キリが俺に向けてそう口にした。思い出すと心臓が早鐘を打った。数多の血管を駆け巡る血流のスピードが上昇する。胃液が逆流し、目の奥が熱くなつていく。キリのことを考える度に心をヤスリで削られていくような感覚に襲われる。

それが間違っているのか。イイ人の方がいいじゃないか。笑顔を無理やり浮かべ、困っている誰かを助けて、優しい人だと思われれることの何が悪いんだ。

俺は保身しか考えられなかった。ずっとそうだった。相手をどうすればどうなるか。取り巻く環境にどう対応すべきか、俺にとって何が最善なのか。人生を歩む最良の手段として良識人の振りをしてきた。

だから妹は俺の前からいなくなつた。俺の本質を見抜いていなくなつた。本当に考えているのは誰かのことではなく——自分のことだけなのだから。

だけど、誰もがそうじゃないのか。そうやって生きていくのではないのか。

「こんばんわ」

反射的に身構えた。いきなり飛んできた声に対応しきれなかった。それでもとつさにファスナーをあげた自分を褒めてやりたい。

ぬつと木の間から歩いてきた人影はボブカットの大人しそうな少女だった。横編模様のクリーム色のブラウスとパステルカラーのプリーツスカート。ニーソッ

クスの下にある赤い靴は可愛らしい見た目とは裏腹にがつしりしている。

くつついた草葉や地面からはねた泥水で身なりは薄汚れてしまっているが、気にした様子はない。

双眸は揺るがず、どんぐり型の大きな目には怯えも警戒もなく、俺を見据えていた。

船でのことを思い出した。あのときと同じく神秘的なほど瞳は透明感に溢れていた。現在も濁りもよどみもなく、生命力の光彩だけが放たれている。

「例えばですね。誰かを襲う計画があるとして、大つぴらに大声で話すのはよくありません。テレビドラマとかであるように負けパターンなんです。フラグが立つってわかりませんか？　そう、一人になったりして別個に撃破されるんです。面白いくらいまんまです」  
「……っ」

周辺の気配を探った。こっちではなくあっちがカタをつけに来る可能性を失念していた。奇怪な虫の声だけが反響している。

闇夜のどこからか飛び出してくるだろう敵影はない。

クスクスと笑い声が漏れ出していた。顔を戻した。

「冗談ですよ。でも、あまり感心はしませんね。もつと行動的になった方がいいです。最初に私を見かけたときに問答無用で捕まえるくらいの気概じゃないと成功しないかと」

「君は……」

「美菜ちゃんです」

自信ありげに薄い胸を張られた。名前を訊いたわけじゃなくて意図を訊いたのだが。

俺の困惑を見て取って彼女はまたも苦笑した。

俺の反応を楽しんでいる。くりくりとした大きな目はいたずら猫のようだった。

再び口を開こうとしたが、機先を制される。

「お兄さん、名前なんですか？」

あさうちひろと  
「朝内広人」

「ヒロちゃんですね」

何が嬉しいのかパンパンッと手を叩いていた。

枝葉の隙間から注ぐ月光に照らされている彼女はお祭りを前にしてはしゃぐ子供のように思えた。

声のトーンも軽くて無邪気だ。微かなトゲも感じさせなかった。

「食料なんですけどね。面白いことがあつて……ま、これはいいか。ともかく、こっちにもそんなにないし、わかりやすく一箇所にまとめたりしないし、個別に管理することになったんです。だから拷問でもしないと多く手に入れるのは難しいと思います」

「そんなことを俺に教えてどうするんだ。こっちに取入りたいのか？」

「私、わりとエスなんです。ヒロちゃんは強盗とかやりたくないんですよ。だから、悪い情報を知れば知るほど顔が歪んでいくでしょ。そういうの見るの好きなんですよ」

「俺だって聖人じゃない。必要なことならどんなことでもやるし、これから君は自分がどうなるか想像できないのか？」

馬鹿か——負けん気を起こしてどうするんだ。言ってしまったから激しい後悔が襲ってきた。

美菜は小首を傾げた。

「勿論です。まあだから、私は抜け駆けすることにし  
たんですよ」

しゃがみこんで背を向け、ごそごそと草むらをまさ  
ぐり始める。

彼女が振り向き直したときにはオートミールの紙箱  
が三つ、手の中に収まっていた。

それは粒状に砕かれた雑穀のつまった袋であり。

この先、生存していくために必要な栄養価を含む代  
物で誰にでも必要なものだった。

「外国製ですが差しあげます。見逃してください」

彼女が生きる上で大事だったものを差し出された。

伸ばした女のか細い腕——こんなにも自分が嫌いに  
なったことはなかった。

自己嫌悪が臍腑から昇ってくる。自分への嫌悪感が  
菌の根を笑わせる。手近な樹木に拳を打ちつけた。

旅行に出かけて一週間足らずで俺は強盗に成り下が  
ったようだった。自虐のあまり笑い出しそうになった。  
実際に鼻で笑っちゃった。

それを肯定と受け取ったのか、美菜はにつこりした。

「約束ですよ」

「受け取ったら俺はクズになっちまう。決めたよ。唐  
宮のことは俺がどうにかするから失せろ」

こみあげてくる感情で気が狂いそうだった。

怒りの奔流が魂を焦がしている。こんな中学生みた  
いな女に助けてと言われるなんて今までにない最低の  
経験だった。

顔を手で覆った。指先で強く眉間を押した。俺は何  
もかもぶち壊してしまいたくなっている。

「はあ……腕がつりそうなので早めに受け取ってもら  
えますか？」

「もらえないつつつてんだろうが。二度も言わせるな」

「まあまあ……ここは一つ、冷静になってくださいよ  
ヒロちゃん。あの愉快的金髪さん。カラミヤでしたっ  
け？ まああの人は自分が弱まっているからびびって  
るんですよ。これは雑穀ですので体力は回復します。  
余裕がなくなってるから早めに優位な立場に立ちたい  
だけなんです」

「そうだ……その通りだ。賢いな」

「いや、ヒロちゃ……なんでもないです」

馬鹿なだけです。そんな続きがあつたのだろう。間違っていない。

吟味するまでもなく美菜の言っていることは合つてゐる。

学校では崇められる立場だつた唐宮がこの島の力関係で一番下になるのは時間の問題だ。

プライドが許さないだろう——性格的に惨めになることを誰よりも嫌っている。美点ではあるが欠点でもある。

「食料を渡して逆効果になるとは思わないのか？ 約束を破つて君たちを襲うかもしれないんだぞ。逃げた方がいいと思うが」

「え、何をおっしゃつてゐるんですか？」

美菜は不思議そうに口を開いた。

ぷつくらとして魅力的な唇は滑らかに動く。

「お願いしたのは、私だけ見逃せ、ですけど」

※ ※

ストレスが増大している。何かが許せなくなる。どんなことでも許せなくなる。

赤音は脇下に置いたペットボトルを手にとつた。ぬるさが過敏になつた神経に障る。だが背に腹はかえられない。慎重に舐めるように飲んだ。口の中に水分を広げて粘膜の渴きを癒した。

樹木に寄りかかつたまま座り込み、退屈と戦いながら海岸を見る日々はかれこれ一週間になる。

相変わらず、眩しい太陽があるだけで海岸線に船の姿はない。すぐに救助されるはずだつた。探索が始まり、ここに辿り着くまでに数日だとなんの根拠もなく予想していた。

それなのに、船は通りかからない。

最初は集まつておしゃべりに興じていたメンバーは自然とそれぞればらばらに行動するようになった。

男女の区分けを行つてから気づいたことが一つあつた。木箱の底の部分が海水に浸かつて濡れていて、食料の一部がダメになつていたことだ。

それだけでは問題はなかった。問題だったのはその後だ。

予想していた備蓄がなかったせいで、つい動揺してしまった。だから食事の配分を計算しようと話し合った。

理想では少しずつ消費することだった。現実とは違った。理想は理想でしかないと思い知ることになる。

食事しか娯楽がなく、それが精神の安寧のための逃げ道になることがわかっていなかった。

誰かが配分を越えて食べればそれにならって食べる。注意をしても、喧嘩を恐れて強く出れない。

リーダーになったつもりはない。そんな責任を背負いたくないから誤魔化してしまった。

そして——例えば、一度でもやけを起こせば終わりだった。ポテトチップを食べ始めればなかなか止まらないうように衝動は抑えきれない。

朝食の缶詰、ナンプラーで味付けされた魚の切り身に思いを馳せた。癖のある臭気だったので、つい一気に喉に流し込んでしまった。もっと味わって口にする

べきだったと自責した。

飢餓状態となっても好き嫌いは存在している。それとも、まだ自分には余裕があるのからこそなのか。余裕がなくなったときにどうなるのか想像もしたくない。

時間が経てば喉が渇く。胃袋がきゅと蠢動する。視界が白みがかってぼやけている。

ベルトが緩くなっているのに気づいた。穴が一つずれてきている。望まない減量の効果。手足が重くなつて動かすのも気だるい。

毎日、食べなければという心と食べてはいけないという心が衝突している。

手にした重みがなくなつた。ペットボトルの中身が気がつけばなくなっていた。振ってみても容器の底に動きはない。

「水……」

記憶では貯蓄は残り五リットルしかない。飲むだけで考えるなら三日持つか持たないかだ。

最初、無計画に砂のついた髪を洗ったり、暑いという理由だけでがぶ飲みしたことを悔やんだ。

おもむろに立ちあがつて茂みに向かった。幾つかある隠し場所の一つは湾曲したブナの下だった。張った根ごと地面の間の空洞に手を伸ばした。

あるはずの感触はなく、手は何度も空を切った。

「ない……」

——盗られた。少しでも冷えるように設置した清潔な真水を盗られた。

瞬時に顔が熱くなった。犯人は誰か。心当たりがあるとすれば反対側の男たちだった。ちよくちよく境界線を越えては探索に向かっているのを知っている。何かを見つけたら、躊躇なく踏み出す。

遠慮やデリカシーなんてものはなかった。それが嫌いだ。いつだって男はそうなのだ。細かいことは気にせず、大雑把に都合のよいように解釈する。

走り出すのには時間がかからなかった。浜辺に人影はなかった。

まるでほとぼりが冷めるまで身を隠したように赤音には感じられ、足を思いつき砂浜に振り下ろし、地団駄を踏んだ。

※ ※

「神様は底意地が悪い。腹ペコの俺にタケノコを掘らせるし、お前の精神を操って『笹の葉は抗菌効果があるし、トイレットペーパーにするか』なんてイカれた台詞も吐き出させた。もうこの島で正気なのは俺しかないかもしれない」

竹林の細長い葉が顔にかかってチクチクする。

種類的に竹ではなくバンブーと呼ばれる植物ではあるのだが竹とほとんど変わらない。だからタケノコを掘っている。手が泥だらけになつて爪の先に侵入してくる。気にしている場合ではない。

今日の昼飯にしたかった。あわよくば夜の分も欲しい。

ぶつくき言いながら唐宮は竹につかまってぶら下がり、体重をかけて幹をへし折った。鈍い音がして根元が跳ねて引き剥がれる。むき出しになった繊維はギザギザで鋭い。



成育した竹を尖らせれば銛として使える。くり貫けば水筒にもなるし、重ねればベッドにもなるし、潰せば紐にもなるし、傾ければ夜露も集めやすい。稀に竹筒に水も溜まっている。

用途は多岐に渡る。竹林は資材の宝だ。

午前中は加工に重点をあてる予定ではあるが。

「笹の葉は抗菌効果があるし、保存のための包装用にもなるだろう。それに清潔なトイレトペーパーが欲しくないのか？」

「どうか神様、もう許してください。俺のダチは無人島生活で人類の進化から離れてケダモノになってしまいました。間に合わなくなるかもしれません」

「やめろ唐宮。目を閉じて両手を合わせるな。毎回、ポケットティッシュを使うのがもったいないと思っただけだ」

掘ったタケノコにこびりついた泥をこそぎ、リュックにしまった。

難破した船の貨物であろう漂流物は幾つか島に流れ着いた。その中にある衣装や衛生用品などは所有者の

承諾なく拝借してしまったがこの際仕方ない。

高望みするなら調理器具や工具品が欲しい——竹を加工するしかないか。

「水を回収しながら帰ろう」

「コンドーム水か。慣れてきたよ。俺のジャスティスを優しく激しく包み込むはずだったゴムは今では樹木にくくりつけた採水道具か」

「お前がダース単位で持ってきてくれて本当に感謝してる」

「サイパンでパンパンする予定だったからな。パツキンはゴムしたがらないらしい。どうしてなんだろうな」  
「多分、自分だけは病気で酷い目に遭うはずがないと思っているからだよ。俺だってこんな目に遭うなんて思ってたかった」

水平にした竹を二人で肩で担ぐ。

ナタがあれば邪魔をする枝葉を切り落とし、歩きやすい道を作ることができるだろうが、現状では飛び出した枝はぐり抜けて進んでいかなければならない。無理な体勢を強いられれば筋肉を傷める。石斧でも

作るか。

「この旅行のために引越しのバイトまでしたのにな。コンビの方がナンパはやりやすいと思った俺が馬鹿だったよ」

「俺はお前と違って女遊びに行きたかったわけじゃないから、遭難してなくてもナンパはしないぞ」

「じゃあ、なんのためにサイパンに行こうとしたんだよ。なんのためにサイパンがあると思ってるんだ」

口が開いて――閉じた。

俺を知る人が誰もいないところに行きたかったから学校に旅行のパンフレットを持っていかなければ唐宮はここにいなかった。そして俺もまたここではない別の場所に居ただろう。

南国の地なんて目指してなかった。目指した場所は――これが終わったら目指せばいいだけだ。

ガサガサッと草木をかきわけける音が響いてきた。草木の振れ幅は大きい。

獣かと考え、場が一瞬だけ緊張したが出てきた影は一応は知った顔のものだった。

「なんだよ。チビ猫ちゃんじゃなくて、チャバネゴキブリちゃんか。勘弁してくれよ。俺は不快なものは目にしたくないんだ」

唐宮はオートミールを手に入れて、チビ猫ちゃんと形容した美菜に関しては気をよくしていた。

美菜は俺たちのところにたまに訪れては雑事をこなしたり、愛嬌をふりまいたりするので恭順を示していると思っている節がある。

行動もちよこまかとして、小動物を思わせるせいかな不思議と愛着が湧いてくる。

一人でも気に入ったせいか強奪は考え直してくれた。まだ油断はできないが、ひとまず落ち着いたといったところか。

俺は美菜に関してはどう接していいかまだわからない。彼女はつかみどころがなく、危機意識が希薄で協調しようとする意図を明確に感じない。どうにもアパート暮らしをしていて、隣の部屋の世話焼きが顔を見せに来ているような感覚だ。

今回、俺たちの目の前に姿を現したチャバネゴキブ

りちゃん——漂流者の一人である茶髪女。髪を縛ってポニーテールになっていたが、意図的に髪の毛を逆立てているのかと思うほど陰湿な気配を発散している。

攻撃的な雰囲気を感じたのか、唐宮は担いでいた竹から手を離れた。

「あたしの水を盗ったでしょ」

顔を見合わせた。確認の目配せ。俺も唐宮もまだルールは破っちゃいないことがわかる動作だった。

互いに身に覚えがない。顔を戻した。

「さっさとかえ——」

茶髪の言い分は強制的に遮られた。唐宮が放った右ストレートで吹っ飛んだからだ。

飛んできた虫を振り払ったようなためらいのまったく感じられない一撃だった。

女を殴ったのは非難すべきことだ。目でそう告げると唐宮は竹を持ち直すことで俺の視線から逃れた。

うぐ、と苦悶の声をあげて顔を押しさえ、草むらに横向きに転がっている茶髪女。殴られたのが信じられないという顔、今までわがままを通してきた女の顔だ。

顔を狙って押し飛ばしたのだから、唐宮はそれなりに容赦はしたのかもしれない。

或いは適当に殴っただけか。

運搬作業を再開する。俺も竹を抱えた。長い竹がしなっていた。

「竹って食べないのになんでタケノコは食べるんだろうな」

「さあな」

唐宮の軽い声は茶髪女に興味がないことを教えていた。殴った結果がどうなるかと知ったことじゃない。

冷酷かもしれないが、俺も殴られた女を抱える気にはなれなかった。今までの経緯もあり、いい感情を持てという方が厳しい。

——お兄ちゃんは本当は冷たい人なんだよ。

妹の声が聞こえた。くだらない幻聴。頭の中で知っているかのように答えた。

「俺は……最低かな」

「え、突然どうしたの？」

唐宮はあっけらかんと言った。

殴った女のことなんて五十メートルも歩けばもう覚えちゃいなかった。

※ ※

殺してやる——静かな怒りが沸々と湧いてくる。

赤音はよろける身体を起こし、ズキズキと痛む額に手をあてた。

あつという間に距離をつめられ、打ち抜かれた。相手が場慣れしていることを身をもつて知った。

喧嘩では勝てない——認めたくなかった。認めてしまったらこのまま泣き寝入りすることになる。

両手が、両膝がぶるぶると震えて怯えている。男たちに立ち向かうことを恐れている。

袖口を握り締めてしわを伸ばした。ぱっぱと付着した土埃を払う。

このままじゃ、どつちにしろ終わりだ。

食べ物も水も奪われたくないから奪った。まともに生きたいから強引に話をまとめた。気に入らない誰か

の代わりに自分は苦しみたくなかった。

視野狭窄が起こっている。他にあるはずの選択肢を探せなくなっていた。もう男たちを排除するしか道はない。

二人をどこかに遠ざけるはずだったのに遠ざけられず、盗みを裁くはずだったのに裁けなかった。

「許せない……っ！」

尻ポケットからハサミを取り出した。思いつきり首筋か背中に突き立ててやればいい。額から流れたこの血と同じように血を流させてやる。どうせあんな不良たちには根性なんてものはない。

憎しみを抱きながらふらふらと歩き、浜辺に向かった。目を見開いてぶつぶつと恨み言を口にし、手に力を込めていた。

ふと、赤音は手にしたハサミに目を落とす。これだけではちっぽけで少し心もとない。もつとまじな武器はないかと思案した。

紐で結んで木の棒にくくりつければ槍になる。そんなアイディアが閃いた。

近づくのは危ない、か。

首尾よく一人を倒せたとしても、まだもう一人いる。帰り道の時間は徐々に怒りに染まった頭を冷やしていく。意思は変わらないが衝動のままに突っ走るような愚は避けたくなってきた。

自分にはない筋肉でつまった大きな身体。齒軋りしそうなほど力の差が恨めしい。

「あら、どうしたの？」

楔点となっている砂浜付近に着くと、タオルで頭を拭いているルナが振り向いた。

枝と枝の間にバスロープを何重にも広げて貧弱なテントのようにしてあり、それが彼女の居住スペースだった。

簡易な木棚には化粧道具や衛生用品の小物が並べられている。常日頃から彼女は髪の毛と肌の手入れに余念がなかった。バスロープのテントに隠れ、強い陽射しを防護している。

鏡台の横にはペットボトルが並べられている——蓋が外されたその一つの底には泥がついていた。

記憶が確かならその薄茶色の土は周辺にはない。ある場所は知っていた。

「あんたが……盗んだの？」

「何が？」

「しらばつくれんじやないわよっ！ あたしの分ですよっ！」

はあっ、とため息をつかれた。

なんてことのないことのように告げられる。

「水と食料を男の人と分けたとき、この耳で確かに貴女の理屈を聞いたわよ。あたしが見つけた物だからあたしの、っていうの。見つけた物はその人の物になるんでしょ？」

——キレた。

再燃する怒りの業火が身も心も焼いていく。つかつかと歩み寄ってルナの頬を打った。ぱしんつと爆竹を鳴らしたような音がした。

ルナも負けてはおらず、キッと睨み返すと手を突き出して赤音の視界を塞ぎ、その隙に強烈な膝蹴りを腹部に放った。くの字に折れる身体。めり込んだ膝で胃



袋を打たれ、こみあげてきた胃液を吐き出しながら片膝をつき、赤音は眉根を寄せた。

こいつにもか、こんな、皿の一つも洗ったことのないような女にも勝てないのか。

赤音はげほげほと咳き込みながら喉を押さえる。ルナは蔑んだ目で見下ろし、鼻を鳴らして背中を向けた。

決着がついたと思っている。憎しみが手を伸ばさせる。艶やかな長髪先端を握った。つんのめって倒れ込んだところに背後から抱きつき、首に手を回した。

「死ね——っ！」

「くっ！ このっ！」

羽交い絞めにする力と逃れようとする力が拮抗する。相手に格闘技の経験があろうがなかるうが、首さえ絞めてしまえば勝ると赤音は踏んでいった。

ルナは酸素を求めて口を大きく開き、状況を解して遮二無二しゃにむににもがいて、両手を振り回した結果、赤音の横顔に偶然にも肘打ちを入れた。

赤音が怯んだ瞬間を見逃すはずもなく腕を開いてル

ナは拘束から脱出した。ついでに肩をどんとぶつけて距離を取る。

未だ赤音が顔を押さえていたので、さっきの仕返しとばかりに赤音の茶髪を手でつかみ、ルナはたぐり寄せた。赤音は頭部に走る痛み耐えかねたのかルナに抱きつくように体当たりした。

砂地のせいかバランスが崩れ、二人はもみ合いながら地に転がる。派手に砂煙が舞った。

目に砂粒が入ったのか、お互いに涙を浮かべて荒い呼吸を吐き出しながら再び殴り合おうと立ちあがれば。

「あはは」

突如、聞こえてきた笑い声で二人ともびたりと動きを止めた。

声の方に視線を向けるとあぐらをかいて楽しそうに目を細めている少女が一人。

美菜が上機嫌で歯を見せてけたけたと笑っていた。

「何がおかしいのよっ！」

赤音は激昂しながら足を踏み出したが、腹部から訪れた鈍痛に手をあて、前屈みになって立ち止まる。

「たかがミネラルウォーターでぶち切れてるのが面白くて、すいません。不謹慎ですよ」

美菜は中身をつまったペットボトルの蓋を指で摘み、わざとらしくちゃぶちゃぶと水音を鳴らす。

赤音はつばを飲み込んだ。自分が酷く喉が渴いていることに初めて気づいた。

「随分、余裕があるのね」

ルナは乱れた髪束の状態を確かめながら皮肉った。伸びて丸くなっていた毛髪を見つけて嫌そうに口角を曲げる。

「余裕ですか？ まあ、水くらいで悩んだりはしてませんね」

「川でも見つけた？」

期待感を込めてルナは尋ねたが、首を横に振られたので落胆を隠せず肩を落とした。赤音も同じく唇を結んだ。

「島の中では地形的にここは隔絶した空間のようです。海を横切って岩礁を越えるか、岩壁を登るかしない」と別のポイントには行けないようです。そして、ここに

は川はありません」

「あいつらにお情けもらってるんでしょ。媚売ってさぞ楽しいでしょうね」

憤りと非難が混ざった赤音の痛烈な皮肉に対して、美菜は動じなかった。相手の精神を逆撫でする小馬鹿にしたような冷笑さえ浮かべる。

「あはは、もうちよつとこの島で生きるってことに真剣になった方がいいですよ。男性恐怖症さんと」

顔を向け、意味ありげに目を細める。

「花売りさん」

ルナの表情から感情が綺麗に消え失せた。真顔で怒りのみをみなぎらせていた。

「馬鹿にしてるのね」

「そういうわけではないですよ。そうだと思ったからそう言っただけです」

「チビの癖に喧嘩売ってるの？ 私、空手二段よ」

「へえ、凄いですね」

ルナは深呼吸して——踏み込んだ。

放った正拳突きは横に歩くことで軽やかにかわされ



た。散歩でもするかのような足運びだった。美菜はのほほんとしながらもしなやかなムチを思わせる鋭い足払いを決めた。ルナは体勢を崩して横転する。砂に埋もれ、顔面から左半身にかけて黄色に染まる。

赤音は胸がすぐような感覚があった。高飛車なこの女は実のところ最初から気に食わないでいた。贅沢と虚栄心の権化のような存在が鼻持ちならなかった。

両方に格闘技の経験があるのは意外だったが、美菜に殴りかからなくてよかったとも思った。これ以上の痛い目はごめんだ。

結局、五人の中で一番弱い立場なのはあたしか。気づいた事実は身を揺らすほどこたえるものだった。気になった疑問を両手を頭の後ろで組んでいる美菜にぶつける。

「花売りってなんのことなの？」

「なんのことでしょうね。私はイメージで語っただけなんですけど。ところで、男性恐怖症は合ってますか？」

「合ってるわ。でも、あんな風な男が嫌いなだけよ。

あたしはあんたみたいにお尻を振らないわ」

強気に吐き捨てたが、美菜は平然としたままだ。

「どんな高潔な女性でも遅かれ早かれ、女に生まれたら男にお尻を振るときがくるんですよ。いやはや、お互いに物悲しいですね。まあ相手を選びすぎたり、シヤットアウトするのは自由ではありますが、生きるためには多少の硬軟は持つことですね」

「考え方の相違ね」

「ま、これで仲良し三人組は終わりになっちゃいましたかね。救助を待ち続けて死ぬのは私はごめんですので、お二人で頑張ってくださいね」

ひらひら、と手を振って美菜は歩んでいく。足取りは軽快だ。迷いはこれっぽっちもない。

方向からして——男二人の方だろう。

倒れていたルナが飛び出した。

殴りかかりそうな勢いではあったが、寸前で感情を押し殺したのかブレーキがかかる。人でも違ったかと錯覚するほど破顔し、美菜に向けて猫撫で声を出した。無理をしてぎこちない笑みを作っているのが誰でもわ

かった。そうしている本人ですら。

「さつきはごめんさい。不安で気が立つてたの」

「いいえ、空手二段が嘘でよかったです。腰が回ってないパンチじゃなかったらあたってたかもなんで。レッスン受けたくらいなんですよね？」

「ぐっ……そつ、それで取り成してくださいさる？」

「おねーさんがそうしたいならいいんじゃないですか。悪感情を持たれているのは誰かさんだけなんで、あつちの仲間に入りたいのなら大丈夫でしょうけど、別の問題が出てくると思いますよ」

「別の問題」には慣れつこよ。もう我慢するのも疲れたし、誰かに頼って安心したいの」

「なら紹介しますね」

「貴女、可愛らしい外見とは裏腹にサバサバしてるわね」

「計算もしてます」

「あら、怖い」

話しながら歩いていく。

二人が豆粒大になったところで——残されたのは自

分一人だけで——赤音は呆然としてしまった。

どうして、こんなことになったのか。

浅い波のような感覚で痛んでくる額と腹——気がつけばしゃがみこんでいた。膝を折って、顔を埋めた。悔しさのあまり涙が出てきた。泣いてはいけない。水分がなくなってしまう。そんなことを考えながらもはらはらと滂沱した。

涙で白く霞んだ海岸線を見つめた。何も浮かんではいなかった。

船の姿はまだ、どこにもない。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**